

りもちとするのも月給の中——と考えるようになりました。

昨秋には飯本先生の名誉授受のお祝の会があり、女高師時代の卒業生と一緒に、卒業生の方が沢山お集まり下さい。飯本先生とことの外お喜びでございました。充実した学生生活を送り来たへほど、学園をなつかしむ心が強いというのは真理のようでございます。卒業生の皆様、職場に或は家庭にさぞ御多忙な毎日をおすごしのことと存じます。

折にふれて研究室にお寄せ下さる御消息、大へんうれしく、研究室がいついまでも、教室の縁につながる人々の、心のよりどころであつてほしいと祈っております。

Mummied Seal

Y. Yoshida.

南極のロス海沿岸ビクトリアランドには、氷河がしだいに退いて地表に姿を現わした露岩地域がある。ここにはモレーンや羊背岩が露出し、また崖壁に谷壁の半をおもわせた大きなU字谷があつて、その谷の底には夏でも融けることのない氷に表面を覆われた湖といくつかある。

こうしたところに、驚いたことにはアザラシのミイラが幾頭もところがつている。主に海で生活するアザラシが、一番遠いところでは海から60kmと離れて、巨大な氷節のように横わつていたのである。¹⁴Cの測定によると600年から2,000年ほど前に生きていたものらしい。このアザラシをめぐつて、フィールドでは珍説が提出された。我々のテントに首を突込んだある若いニュージーランドの学者は、アザラシが露岩の暖を求めて海からやつて来たのだという。わがパーティの一員は大きな津波に運ばれたのではないかと考える。集団登山遭難(?)説まで出た。昔あつたかと思われる温泉にぞと入りに来たのかと知れない。それはともあれ、モレーンや岩盤のごつごつした起伏、ときには氷河を越えて、数十料と高い登るのは容易ではなかつただろう。

帳めしげに剝出した眼玉に映る青空を見て、大いに同情しながら、この眼玉が眺めてきた南極の自然の移り変りはさぞどんなであつたろうとふと考えた。

